

日本心理学会第 78 回大会自主企画シンポジウム
嗜好品研究の最前線—人はなぜ嗜好品を嗜むのか—
2014 年 9 月 10 日（水）第 1 日目 13:10~15:10 (RY303)

The state-of-the-art study of the ‘Shikohin’: Why do people consume the ‘Shikohin’?

1. シンポジウム登壇者

話題提供者：中谷素之（名古屋大学／Nagoya University）

藤本憲一（武庫川女子大学／Mukogawa Women’s University）

廣中直行（独立行政法人科学技術振興機構

／Japan Science and Technology Agency）

横光健吾（公益財団法人たばこ総合研究センター

／Tobacco Academic Studies Center）

指定討論者：坂野雄二（北海道医療大学／Health Sciences University of Hokkaido）

杉浦義典（広島大学／Hiroshima University）

司 会 者：金井嘉宏（東北学院大学／Tohoku Gakuin University）

2. シンポジウム企画趣旨

わが国の嗜好品摂取状況について、厚生労働省（2012）の調査では、飲酒習慣のある者の割合は 20.2%、喫煙習慣のある者の割合は 20.1%、全日本コーヒー協会（2013）の調査では、「よく飲む」・「時々飲む」と回答した者の割合が、コーヒーで 89.1%、日本茶・ウーロン茶で 87.8%であった。このように、日常生活を送るなかで、人々はさまざまな嗜好品を摂取している。嗜好品に関する先行研究について、嗜好品摂取と健康の関係を検討した研究は多いが、嗜好品のもたらす直接的な効果や嗜好品が日常生活にもたらす役割を検討した研究は少なく、さらなる研究が必要であると考えられる。

そこで、本シンポジウムでは、嗜好品を対象とした研究（薬理学、社会学、心理学）を紹介し、今後の嗜好品に関する研究を行っていくうえでの方向性や発展的研究の可能性、今後の課題について議論を行うことを目的とする。

3. 話題提供

(1) 動機づけの心理学からみた嗜好品研究の試みー摂取への動機づけは嗜好品の もたらす効果に影響するかー 名古屋大学 中谷素之

現代社会における心理的健康を保つには余暇の質・量が重要な意味をもつ。多くの人は、リフレッシュのためにコーヒーやたばこ等の嗜好品を摂取し、その後の活動により積極的に取り組んでいる。話題提供では、嗜好品摂取への動機づけが心理的適応に及ぼす影響を検討するために行った、20代～50代の700名を対象とした研究成果を報告し、自尊感情やアイデンティティに動機づけの質（自律性）が重要な役割をもつことについて述べたい。

(2) 嗜好と嗜癖の間ー脳科学からの考察ー 独立行政法人科学技術振興機構 廣中直行

嗜好品には「繰り返し摂取したくなる」性質があり、この点は嗜癖を招く麻薬や覚せい剤にもみられる。しかしながら、嗜好品に含まれるアルコール・ニコチン・カフェインの神経科学的な作用機序は多様であり、この点に麻薬や覚せい剤との違いがある。嗜好品には多様性が担保されているが、嗜癖につながる化学物質はそうではない。神経科学の知見から嗜好と嗜癖の相違を描き出すことを試みる。

(3) 「アンチ・ストレッサー」としての嗜好品ー社会学的「小確幸」の視点からー 武庫川女子大学 藤本憲一

嗜好品は、「嗜癖」からの「逸脱」・「援助」の文脈で捉えられることが多い。しかしながら、嗜好品は社会全体を覆う「啓蒙」・「合理（疑似科学）」・「生産（効率）」主義を問い直す、重要な契機ともなりうる。話題提供では、嗜好品を「アンチ・ストレッサー（反ストレス要因）」と定義したうえで、「小確幸（文化面）」（村上春樹）と「マイクロフロー（心理面）」（M.チクセントミハイ）を架橋する可能性について述べたい。

(4) 嗜好品摂取によって獲得できる心理学的効果の検討

公益財団法人たばこ総合研究センター 横光健吾

当センターでは、嗜好品を「栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物。酒・茶・コーヒー・タバコの類」（新村，2008）と定義し、嗜好品が人生の豊かさに及ぼす影響に関する研究を行っている。これまでに、嗜好品摂取によって4つの心理学的効果を獲得できることを明らかにしてきた。話題提供では、嗜好品摂取によって得られる心理学的効果に関する研究結果の報告と今後の心理学研究の方向性について述べたい。